

■研究活動の概要

当初の計画では、2020年9月より一年間、タイにおいて研究活動を行うつもりであり、派遣先のチュラーロンコーン大学社会調査研究所から特別研究員として受入許可証を得ていたが、新型コロナウイルスの地球規模での感染拡大にともない渡航を取り止めざるをえなくなった。もともとタイにおける先住民をめぐる問題について研究をすすめる予定であったが、急遽学外派遣先を北海道へと変更し、日本における先住民をめぐる問題について、タイとの比較を視野に入れて研究に取り組むことになった。そこでお世話になったのは、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の藤野陽平准教授である。受入教員として施設内の研究室を用意していただくなど、各種手続きの労をとっていただいた。そのおかげで、学内の図書館やインターネット・サービス等を利用することができ、研究に必要な資料を渉猟することが可能となった。その一方で、北海道広域で行う予定であった、博物館等の施設への訪問や儀礼（観光対象となっている祭祀も含む）の観察といった実地調査は、新型コロナウイルス感染症の影響で閉／休館ないし中止されることが多く断念する機会がほとんどであり、主に学内における研究活動をすすめざるをえなかった。

■研究内容および成果

本研究が対象とする先住民とは、タイに暮らすモーケンと日本に暮らすアイヌの人々である。モーケンはタイとミャンマーのアンダマン海域に暮らす少数民族であり、私は彼らの生活・文化について調べるために2003年より研究を続けている。元来、モーケンは船を住まいとしながら魚介類を求めて移動性の高い生活を送っていた。そうした漁民としての生活に変化が訪れるようになったのは、タイのアンダマン海において政府による観光開発が推進された1980年代以降のことである。現在では、モーケンの多くが観光業に携わるようになっている。つまり観光現象を無視して現代のモーケンの生活・文化を語ることはできなくなっている。他方、彼らは今でも漁業を主軸とした生活を送っているのも事実である。そのため、本研究では彼らの漁民としての生活も視野に入れながら、観光への関わり方について調査をすすめた。

アイヌは北海道を中心として、サハリン南部や千島列島などに多く暮らしている人々である。近世以後、本州の中央政権の影響を強く受けるようになり、彼らの生活は大きく変わる事となった。先住民としての権利（たとえばサケ漁やカラフトマス漁を行政の許可なく行えること）を認めるか否かといった事や、遺骨返還問題など解決すべき課題が山積している。そのような人としての尊厳に関わる深刻な問題に耳目が集まる一方で、近年注目を浴びているのは観光対象としてのアイヌの生活・文化である。2020年7月12日に白老に開業したウポポイ（民族共生象徴空間）には、北海道初の国立博物館である国立アイヌ民族博物館と国立民族共生公園、そして慰霊設備が整備されている。野田サトル作の

『ゴールデンカムイ』の人気も手伝い、多くの人たちがアイヌに関心を抱くようになっており—2021年7月3日から8月22日にかけて、ウポポイにおいて「ゴールデンカムイ トゥラノ アプカシアン：杉本佐一とアシリパが旅する世界」と題する特別展示が開催された—、その一部は観光客としてウポポイや二風谷まで足を運んでいる。アイヌもまたモーケンと同様に、観光現象を通じて外部社会との接点を増やしているといえる。

以上の背景をもとに行った主な活動は、研究会・学会・セミナーへの参加である。対面で開催される予定だったものもいくつかあったが、結局すべてオンラインでの参加となった。以下、主なものを年月日順に記す。

2020年9月11日、国立民族学博物館共同研究「統治のフロンティアをめぐる人類学：国家・資本・住民の関係を考察する」

- ・池谷和信（国立民族学博物館）「フロンティア空間の発見と消失：乾燥帯アフリカの事例」
- ・桐越仁美（国士館大学）「砂漠と海を結ぶ人びと：西アフリカにおける長距離交易の変遷と商業民ハウサの外部社会との結節」
- ・岡野英之（近畿大学）「ゴールデン・トライアングル：二つの国家のフロンティアが重なるハイブリッド・ガバナンスの領域」

2020年9月25日、さっぽろ自由学校遊セミナー「アイヌ民族とサケ漁の権利」

- ・ラポロアイヌネイション（長根弘喜）、平田剛士「サケ漁の権利をめぐる提訴について」
- ・貝澤耕一／宇梶静江／萱野志朗／木村二三夫ほか「アイヌ民族からのメッセージ」

2020年9月29日、Indigenous Media: Development Strategies Seminar "Cold Lands."

- ・CHRISTOFOROV Valentin（the Indigenous Peoples ILKEN Newspaper）How Do Media Contribute to the Sustainable Development of Indigenous Peoples?
- ・DYACHKOVA Jeanne（the Association of Luoravetlans）Culture and Languages of Luoravetlan (chukchi) People.
- ・NADKIN Valery（NEFU）Indigenous Media Issues in the NEFU Master Student's Thesis.
- ・MAGIDOVICH Marina（the Herzen Russian State Pedagogical University）Media Landscape of Yakutia and Its Impact to Information Consumption of Young Generations.
- ・TATASIANA Tsagelnik（Hokkaido University）Ainu Language Attitudes, Colonial Trauma, and Ancestral Language Transmission
- ・Amanda Gomez（Hokkaido University）Heritage Management and Indigenous Cultural Landscapes

2020年12月19日～20日、東南アジア学会研究大会

2021年1月9日、国立民族学博物館共同研究「統治のフロンティアをめぐる人類学：国家・資本・住民の関係を考察する」

- ・寺内大左（東洋大学）「土地開発フロンティアを生きる焼畑民：カリマンタンの消えゆく熱帯林から」
- ・宮地隆廣（東京大学）「ラテンアメリカにおける国家研究の射程」
- ・武内進一（東京外国語大学）「アフリカ農村部の土地をめぐる統治：ルワンダとコンゴ民主共和国」

2021年1月23日、「社会性の起源と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」方法論研究会

- ・大村敬一（放送大学）「客観的記述から生産的変容へ：文化人類学における他者の記述をめぐる問題」

2021年2月5日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・中村香子（東洋大学）「『マサイ』民族文化観光における『苦境』の観光資源化に関する一考察」

2021年2月19日、Placing Sea Nomads Marine Knowledge and Heritage in Western Austronesians History

- ・Jaques Ivanoff（Center National De La Recherche Scientifique）What the Moken Corpus Interpretation Can Teach Us?
- ・Cynthia Chou（University of IOWA）The Orang Suku Laut and the Art of Resistance

2021年2月25日、Placing Sea Nomads Marine Knowledge and Heritage in Western Austronesians History

- ・Narumon Arunotai（Chulakongkorn University）Chao Lay（Sea People）：Livelihoods and Natural Resource Management
- ・Wengki Ariando（Chulakongkorn University）Indonesia in the Context of Coastal and Marine Co-management System of the Bajau

2021年3月2日、「負債の動態に関する比較民族誌的研究」

- ・生駒美樹（東京外国語大学 AA 研）「債務奴隷と賃労働：19世紀東南アジア大陸部債務奴隷と現代ミャンマーの茶摘み労働者の事例から」
- ・中山智香子（東京外国語大学）「支払手段としての貨幣の思想史的考察：G.F.クナップ『貨幣の国家理論』（1905）を手がかりに」

2021年3月4日、Placing Sea Nomads Marine Knowledge and Heritage in Western Austronesians History

- ・ Vivienne Wee (AWARE Singapore) Who are the Orang Laut (Sea People) ?
- ・ Zau Lunn (Fauna & Flora International-Myanmar Programme) Strengthen the Collaborative Management of Marine Living Resources for Future of the Moken in Myanmar
- ・ Pittayawat Pittayaporn (Chulalongkorn University) Linguistic Evidence and Migration Stories of Thailand's Sea People
- ・ Maxim Boutry (Moken Alive Museum Project) Oppression, Moken Mobility and Territory: A Ritual Perspective

2021年3月5日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・ 紺屋あかり (明治学院大学) 「ポストコロニアル・ノスタルジア：パラオ老人会と日本人観光客との交流の場を事例に」
- ・ 岡本健 (近畿大学) 「コンテンツツーリズムから考える現実・情報・虚構空間と身体的・精神的な移動：アニメ聖地における旅行者の「リアリティ」を考える」

2021年3月14日、Placing Sea Nomads Marine Knowledge and Heritage in Western Austronesians History

- ・ Clifford Sather (Borneo Research Council) The Bajau (Sama) of Eastern Borneo, the Southern Philippines, and Coastal Sulawesi

・

2021年4月17日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・ 越智郁乃 (東北大学) 「地域文化の翻訳：新潟県新潟市とフランス・ナント市の芸術祭を事例に」
- ・ 藤野陽平 (北海道大学) 「親日台湾を求めて：観光化する台湾の日本神の例から」

2021年5月16日、「負債の動態をめぐる比較民族誌的研究：アジア・アフリカ・オセアニア農村社会を中心に」

- ・ 大竹碧 (京都大学大学院) 「補償金の支払いと使用が生み出すもの：クワジェリン環礁における米軍基地建設の事例から」
- ・ 深田淳太郎 (三重大学) 「貝貨の死蔵は「生の負債」の返済か？：パプアニューギニア、トーライ社会から原初的負債論を考える」

2021年5月22日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱

観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・松本健太郎（二松学舎大学）「重層化する状況：モノとイメージのネットワークを紡ぐもの」
- ・福井栄二郎（島根大学）「観光業と社会の分断？：ヴァヌアツ・アネイチュム島における社会変化から」

2021年6月6日、「社会性の起源と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」若手研究会「配偶形態・婚姻形態・社会組織・親族関係」

- ・川添達朗（東京外国語大学 AA 研）「ニホンザルのオスの行動から探る集団の境界」
- ・河合文（東京外国語大学 AA 研）「マレーシア半島部クアラ・コにおけるバテットの「養子」の実態：親族関係にかんする予備的考察」
- ・田所聖志（東洋大学）「パプアニューギニア農耕民における天然ガス開発と結婚形態の変化」

2021年7月10日、日本タイ学会研究大会

2021年7月24日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・安田慎（高崎経済大学）「脱領域化／再領域化する「中東都市」：湾岸諸国における旧市街開発を事例に」
- ・奈良雅史（国立民族学博物館）「民族観光の展開：中国雲南省回族社会の事例から（仮）」

2021年8月20日、国立民族学博物館共同研究「グローバル化時代における「観光化／脱観光化」のダイナミズムに関する研究」

- ・須永和博（獨協大学）「マスツーリズムと先住民観光：北海道・白老地域のアイヌ観光を事例として」
- ・東賢太郎（名古屋大学）「ビーチリゾートの「終わりなき日常」といくつかの事件：フィリピン・ボラカイ島の調査から」

2021年8月25日、北海道大学アイヌ・先住民研究センター「アイヌ講座」

- ・北原モコットウナシ（北海道大学）「アイヌ文化研究とケア：トラウマの回復・ステイグマの軽減」

以上の他、タイ語の研究会にも参加したが省略している。本学外派遣の研究内容に密接に関わるという意味で、特に研究の深化に役立ったものは「Placing Sea Nomads Marine Knowledge and Heritage in Western Austronesians History」と題された4回にわたって開催されたセミナー、そして国立民族学博物館主催の「グローバル化時代における「観光化

「脱観光化」のダイナミズムに関する研究」という研究会であった。前者では、世界各地の著名な研究者が集まり、東南アジア各地の海民についての報告がなされた。私が長年調査を続けている海民モーケンだけでなく、インドネシアやフィリピンに多く暮らすサマ（バジャウ）やインドネシアのオラン・スク・ラウトといった海民についても取り上げられた。文化人類学だけでなく、歴史学や言語学といった学際的な観点から分析されており、私の研究対象であるモーケンについて理解を深められた。

後者は、20世紀から21世紀にかけて急速に成長した観光産業とそれに伴い活発化した人々の移動、そしてオーバーツーリズムや自然環境破壊等を契機として観光事業を縮小ないし停止するという反対の動きをそれぞれ「観光化」と「脱観光化」というキーワードで捉え、文化人類学者を中心とする研究者が集まり、それぞれのフィールドの事例を報告・議論し、新しい理論的転回を図ろうとする共同研究会である。私も2021年2月5日開催の研究会において、「海民村落比較研究事始：タイ領アンダマン海域における「観光化／脱観光化」と題する口頭発表をした。

報告では、タイ旅遊奨励公団（現タイ国政府観光庁の前身）が設立された1960年から2020年までを対象として、60年間を草創期、成長期、発展期、成熟期の4つにわけて、タイで起きた観光全体の出来事を分析したのち、海民が暮らすスリン諸島、プーケット島、ピピ諸島で観光化と脱観光化がどのようにすすんでいるのかについて論じた。特に後半部では、新型コロナ感染症の感染拡大によってタイ各地の海民が観光業の職にあぶれている「脱観光化」の動きを紹介した。また、研究成果の一部として、「かりそめの観光、ゆきずりのシーブシー」と題する報告を『月刊みんぱく』の第44巻12号において発表した。

2021年3月17日には、北海道大学大学院主催の研究プロジェクト「コロナ時代における新しい「つながり」（研究代表者：天田顕徳准教授）の研究会において、「ポスト・コロナ時代におけるタイの南海産品をめぐる研究の展望：モーケン人の新しい〈つながり〉」と題するプレゼンテーションを実施した。

報告では、南海産品と呼ばれる中国と世界の華人市場を流通の最終目的地とする海産物に着目し、1. 南海産品とナマコ、2. モノ研究におけるナマコ、3. プレ・コロナ時代における管理・生産・販売、4. ポスト・コロナ時代における管理・生産・販売という構成で、先住民モーケンの漁業のあり方がコロナ前と後でどのように変化してきているのかについて検討した。2020年の段階で、タイ農業・協同組合省の漁業局が、国家経済を牽引する水生生物の一つとしてナマコを捉えるようになったことが明らかとなり、今後モーケンが採捕するナマコの生産・流通の様態が激変する可能性を指摘した。

以上のように、タイの先住民モーケンに関するアウトプットは蝸牛の歩みながらも少しずつすすめてきている。他方で日本の先住民に関する成果については資料の整理中である。

最後に、コロナ禍で大変な時期にあるにもかかわらず、学外派遣の機会を与我えていただいた学校法人国土館ならびに受け入れていただいた北海道大学、またその関係者の皆さまに心より感謝申し上げたい。本学外派遣で得られた知見を研究だけでなく、教育にも十分に活かしていく所存である。